

平成31年度農作物病害虫発生予察情報

発生予報 第1号（3～4月予報）

発表日：平成31年3月12日

岩手県病害虫防除所

I 情報の要点

1 水稲

◎**細菌病類は多の予報**です。播種から育苗期間中の温度管理には細心の注意を払いましょう（2月6日発行の注意報第1号（水稲 細菌病類）を参照すること）。

2 りんご

◎**腐らん病がやや多の予報**です。発病や前年の病斑からの再進展は、3月頃から確認されるので、処理済みの病斑、切り口癒傷部、摘果痕や採果痕などを注意して観察し、早期発見に努めましょう。

◎**黒星病がやや多の予報**です。重点防除時期（開花直前）のE B I剤は、前年の発生園地では本病に卓効のスコア顆粒水和剤を選択しましょう。また、降雨日を考慮した薬剤散布を心がけましょう。

◎**リンゴハダニは発生時期がやや早い予報**です。剪定時に枝の分岐部等を注意して観察し、越冬卵が確認された園地では、芽出前～発芽2週間後までにマシン油乳剤で防除を行いましょう。

II 農薬の安全使用

1 農薬の使用にあたっては、他作物や周辺環境に影響が及ばないように十分配慮し、対策を講じましょう。

2 水稲育苗ハウスで後作に野菜等を栽培する場合は、農薬が土壌に残留しないよう、箱施用剤の処理をハウス外で行うか、ハウス内では無孔のビニールシートを使用するなどの対策をとりましょう。

【利用上の注意】

本資料は、平成31年2月末現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

- ・農薬は、使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任を持って使用しましょう。
- ・農薬使用の際には、(1)使用基準の遵守(2)飛散防止(3)防除実績の記帳を徹底しましょう。

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】 TEL 0197(68)4427 FAX 0197(68)4316

☆この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

アドレス <https://i-agri.net/Index>

Ⅲ 3ヶ月予報（3月～5月、仙台管区气象台、2月25日発表）

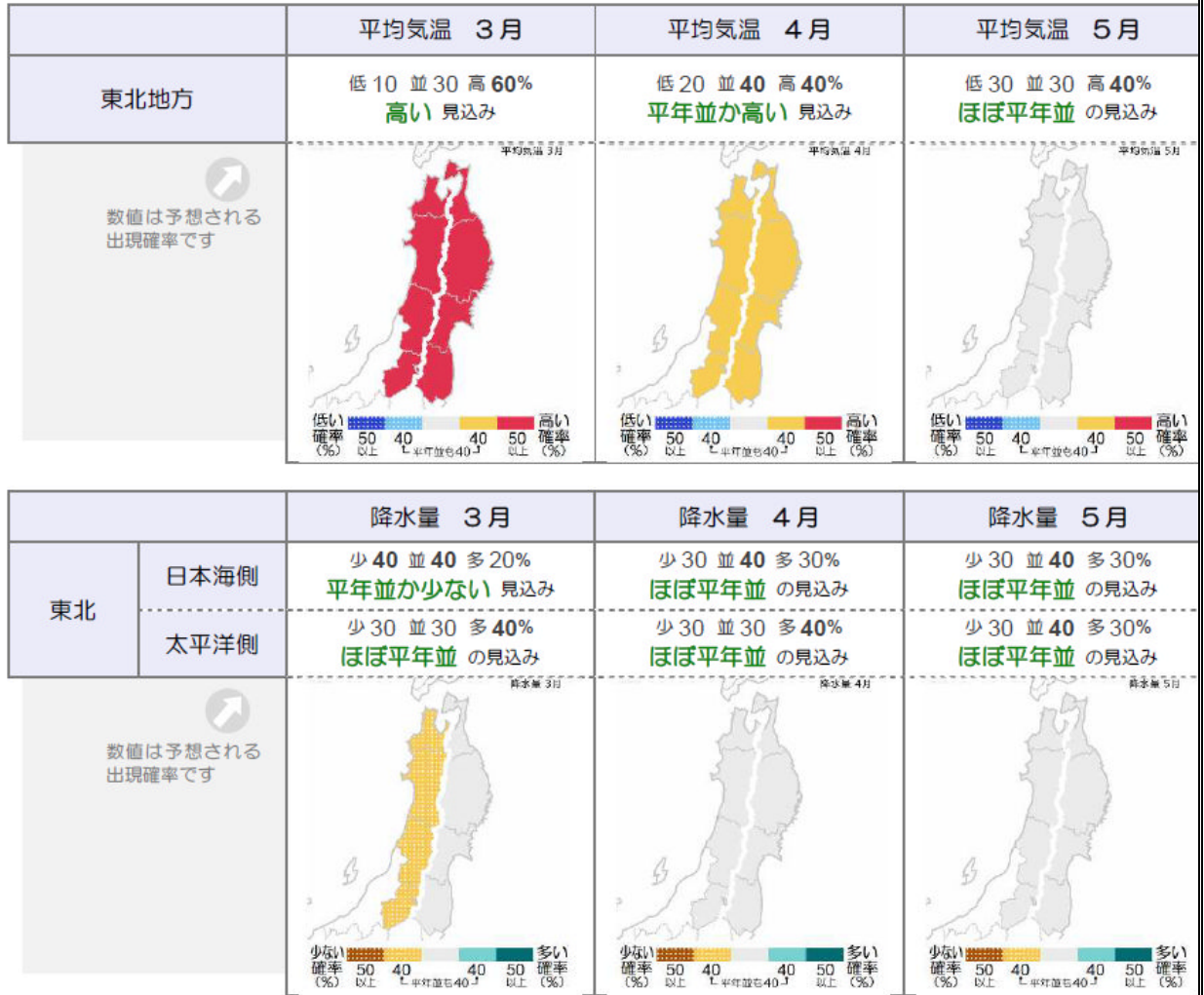
向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

3月 東北太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

4月 東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

5月 高気圧と低気圧が交互に通り、天気は数日の周期で変わるでしょう。

月別の平均気温・降水量



図は仙台管区气象台ウェブサイト (<http://www.jma-net.go.jp/sendai/>) より引用

水稻病害

1 予報（4月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
苗立枯病 (リゾプス、トリコデルマ属菌)	(育苗期)	並	(1) 化学合成農薬消毒済み種子が広域で使用される。(－) (2) 4月の気温は、平年並か高い予報。(＋)
苗立枯病 (フザリウム、ピシウム属菌、ム苗)	(育苗期)	並	(1) 薬剤防除の実施率が低い。(＋) (2) 4月の気温は、平年並か高い予報。(－)
細菌病類 (もみ枯細菌病) (苗立枯細菌病)	(育苗期)	多	(1) 前年の出穂期前後の気象は籾への感染に好適であった。(＋) (2) 4月の気温は、平年並か高い予報。(＋)
ばか苗病	(育苗期)	少	(1) 前年の本田での発生は平年より少ない。(－) (2) 化学合成農薬消毒済み種子が広域で使用される。(－)
いもち病	(育苗期)	やや少	(1) 前年の穂いもち発生量は平年より少なかった。(－) (2) 化学合成農薬消毒済み種子が広域で使用される。(－) (3) 4月の気温は、平年並か高い予報。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

本年は、育苗期に細菌病類が多発する恐れがあるので、播種から育苗期間中の温度管理には細心の注意を払うこと（2月6日発行の注意報第1号（水稻 細菌病類）も参照のこと）。

【共通事項】

- (1) 種子更新は必ず行う。
- (2) 化学合成農薬による種子消毒では、低温により初期生育が遅れることがあるので、水温、育苗温度に注意する。生物農薬（消毒済み種子を含む）の場合は、処理方法や育苗管理に特に注意する。
- (3) 稲わら、もみ殻等は、いもち病・ばか苗病の伝染源になるので、作業室、育苗ハウス及びその周辺に置かない。
- (4) 浸種 水温 12～15℃とし、10℃以下にしない。また、購入種子と自家産種子、品種が異なる種子は同時に浸種しない。異なる薬剤で消毒した種子は、別々の容器で浸種する。
- (5) 催芽 水温は 30℃を超えない。循環式ハト胸催芽器を用いる場合は、催芽器内に入れた桶内で催芽する等、種子のまわりの水を直接循環させないよう工夫する。
- (6) 出芽 加温出芽を基本とし、出芽温度は 30℃を厳守する。
- (7) 緑化～硬化期
 - ア 別表を参考に、適正な温度管理に努める。
 - イ 出芽時及び緑化期に 10℃以下の低温に遭遇すると、生物農薬の効果が不安定になる。このため、加温出芽を行うとともに、ハウス内で緑化する場合には被覆資材等による保温に努める。
 - ウ プール育苗の場合は、置床の均平作業をしっかり行い、入水時期および水位に注意する。

表 育苗期の温度管理の目安

	稚 苗		中苗・成苗		プール育苗
	緑化期	硬化期	出芽揃い～3.5葉	3.5～4葉	
日中	20～25℃		20～25℃	15～20℃	水温25℃以下
夜間	15～20℃	10～15℃	5～10℃		水温10℃以上

【苗立枯病】

- (1) 育苗期間の低温（4℃以下）、培土の高 pH、浸種やかん水における川水や池水の使用は、ピシウム属菌による発病を助長する。
- (2) 薬剤防除を行うことが望ましいが、できない場合は育苗用水の吟味や育苗施設の温度管理等を徹底する。

【細菌病類】

(1) 耕種的防除

- ア 育苗期間中（特に催芽・出芽時、緑化～硬化初期）の高温は発生を助長するので、適正な温度管理に努める。
- イ プール育苗は、細菌病類の発生を抑制するのに効果的である。
- ウ その他、育苗期の留意点は以下のとおり。

<育苗期の留意点>

項目		対策
塩水選		○充実した種子を確保するため、可能なものは実施。ただし、消毒済み種子の場合は、薬剤流出の危険があるため、実施しない。
予措	浸種	○12～15℃とし、10℃以下にならないようにする。消毒済み種子の場合は、水換えは種子に付着した薬剤が落ちないように注意して静かに行う。
	催芽	○30℃を厳守する。過度の加温や長時間の催芽は発病を助長するので絶対に行わない。 ○健全種子への感染拡大を防ぐため、水を強制的に循環させる装置（循環式ハト胸催芽器等）を用いる場合は、催芽器内に入れた桶内で催芽する等、種子のまわりの水を直接循環させないよう工夫する。
播種		○厚播きは発病を助長するため、基準の範囲内で可能な限り薄播きとする。
出芽		○出芽器の庫内温度は30℃を超えない。過度の加温は発病を助長するので、絶対に行わない。
育苗	ハウス温度	○育苗ハウス及びトンネルの開閉をこまめに行い、育苗温度は25℃を超えない。
	かん水	○過かん水は発病を助長するので絶対しない。
プール育苗		○プール育苗の場合、入水を硬化初期から行う。 ○緑化終了後2～3日以内に湛水（ヒタヒタではなく、十分な水深を確保）にしないと抑制効果が期待できないので注意する。

(2) 薬剤防除

- ア 岩手県農作物病害虫・雑草防除指針に掲載している有効な薬剤で種子消毒を行うこと。
- イ イソチアニル粒剤（箱施用剤）の播種前又は播種時（覆土前）処理を、種子消毒と併せて実施すると防除効果が高まる。

【ばか苗病】

- (1) 育苗中の発病苗（徒長苗）は抜き取り、本田に持ち込まない。

【いもち病】

- (1) 育苗箱では種もみが露出しないように覆土を十分に行う。
- (2) 葉いもちが早期に発生する地域や前年多発した地域では、育苗期に葉いもち防除（かん注処理）を実施することが望ましい。

りんご病害

1 予報（3～4月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
腐らん病	—	やや多	(1) 前年の巡回調査での発生園地率は、平年並であった。(±) (2) 枝腐らんが増加傾向であり、伝染源は多いと予想される。(＋)
モニリア病	—	並 (平年少発生)	(1) 前年の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 4月の降水量は、ほぼ平年並の予報。(±)
黒星病	—	やや多 (県北部：多)	(1) 近年、発生が増加傾向であり、前年の巡回調査では県北部で発生が多かった。(＋) (2) 4月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【腐らん病】

- (1) 発病や前年の病斑からの再進展は、3月頃から確認されるので、処理済みの病斑、切り口癒傷部、摘果痕や採果痕などを注意して観察し、早期発見に努める（図1）。本病は、発生樹及びその隣接樹に次年度も発生する傾向があるので、発病歴のある樹とその周辺も注意して観察する。
- (2) 枝腐らんの早期発見に努め、見つけ次第剪除する。
- (3) わい性樹の胴腐らんでは、側枝基部の発病が多いので、この部分をよく観察する（図1）。
- (4) 胴腐らんは、病斑を見つけ次第、患部を残さず紡錘形に丁寧に削り取り、その上から本病に有効な薬剤を塗布する（図2、3）。
- (5) 削り取った病患部や剪除した枝は、園地内に残さないよう処分を徹底する。
- (6) 剪定の切り口、日焼け、凍寒害、枝折れなどの外傷部には、トップジンMペースト又はバッチレート塗布する。トップジンMオイルペーストは、外傷部のゆ合を阻害するので使用しない。
- (7) 多発園では、芽出前にトップジンM水和剤、ベンレート水和剤、ベフラン液剤25、または石灰硫黄合剤を散布する。できるだけ動噴で散布し、薬液が幹にも十分付着するようにする。

【モニリア病】

- (1) 近年、モニリア病が発生した園地では、芽出当時（発芽5割頃）と芽出10日後に有効な薬剤を散布する。孢子飛散開始期前の降雨前に防除を行うことが重要である。
- (2) 子実体（キノコ）からの孢子飛散時期（例年4月第3半月頃～）は年により変動するので、防除速報を参考とするなど今後の動向に注意し、防除時期が遅れないようにする。
- (3) 葉・花ぐされの発生が見られたら、見つけ次第摘み取り処分する。
- (4) 雪融けの遅れ等、園地が湿っていると子実体の生育にとって好条件となる。常発園では、消雪促進、排水対策、除草、落葉処分などを励行し、園地が早く乾くよう努める。

【黒星病】

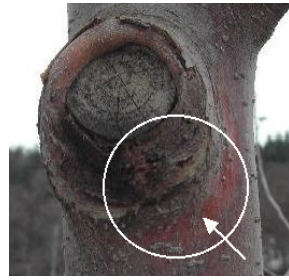
- (1) 重点防除時期である開花直前にEBI剤を散布する。
- (2) 前年の発生園地では、開花直前のEBI剤として、本病に卓効を示すスコア顆粒水和剤を用いる。
- (3) 前年の多発園地（本病の早期感染の特徴である花叢葉の裏側や果実がく片の発病が多かった園地）では、開花7～10日前にEBI剤を特別散布する。また、開花直前はEBI混合剤のスコアMZ水和剤を用いる。
- (4) EBI剤は、降雨前または降雨直後の散布で効果が高いため、降雨日を考慮した薬剤散布を心がける。
- (5) 散布した薬液が樹全体に到達するように、十分な散布量を確保する。
- (6) 前年に発生が見られた園地では、被害落葉は伝染源となるので芽出前までに集め処分する。

○苗木、未結果樹

- (1) 苗木を定植する際には、頂芽にりん片越冬する可能性があるため、必ず頂部先端を切り返す。
- (2) 苗木および未結果樹についても成木と同様に薬剤防除を徹底する。



側枝基部病斑



側枝切口ゆ傷組織部



前年発病部再進展

図1 わい性樹における主な胴腐らんの発病部位

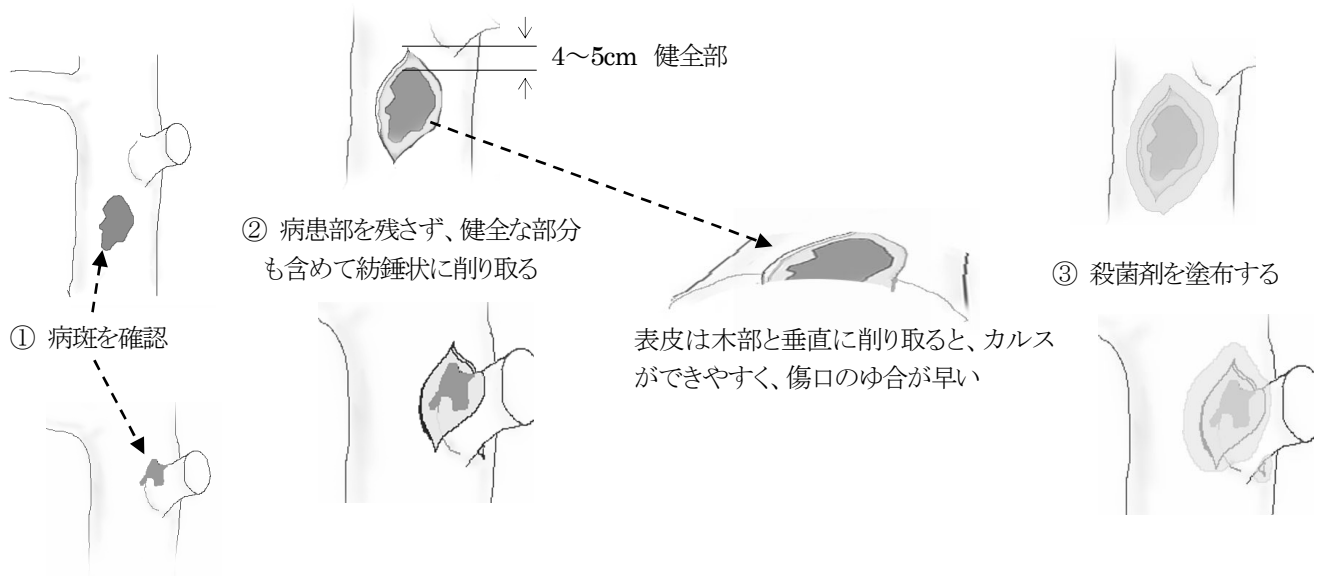


図2 腐らん病の処置 (通常の方法)

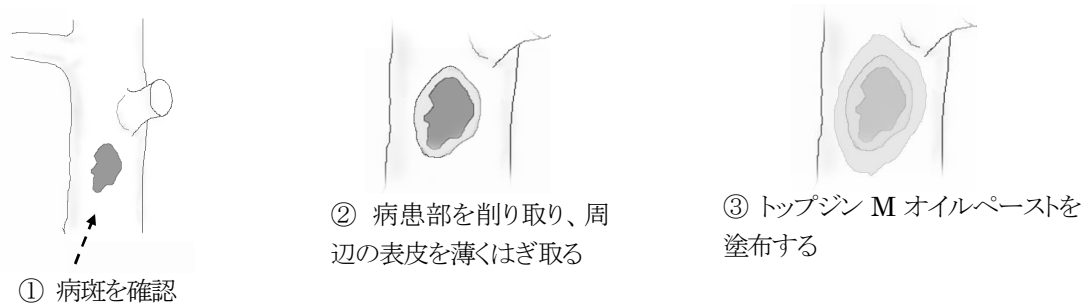


図3 腐らん病の処置 (省力的な方法)

トップジンMオイルペーストは浸透性が強いので削り取りの作業時間を3~4割短縮できる。

※トップジンMオイルペーストは、胴腐らんの処置にのみ利用する

りんご害虫

1 予報（3～4月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
ハマキムシ類	やや早	並	(1) 4月の気温は、平年並か高い予報。 (2) 前年秋期の発生園地率は、平年並に低かった。(±)
リンゴハダニ	越冬卵 ふ化時期 やや早	並	(1) 4月の気温は、平年並か高い予報。 (2) 前年秋季の発生園地率は平年並に低かった。(±)
キンモン ホソガ	越冬世代 羽化時期 やや早	やや少	(1) 4月の気温は、平年並か高い予報。 (2) 前年秋期（第4世代）の発生園地率は、平年より低かった。(－)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ハマキムシ類・リンゴクビレアブラムシ】

(1) 展葉期の防除薬剤は、有機リン剤を使用する。

【リンゴハダニ】

(1) 剪定時などに枝の分岐部等を注意して観察し、越冬卵が確認された園地では、芽出前～発芽2週間後までにマシン油乳剤で防除を行う。特に、近年発生の多い園地では、芽出前～芽出当時の防除に努める。

(2) マシン油乳剤を散布する場合は、風の弱い日にムラが出ないようにゆっくり丁寧に十分量を散布する。

【キンモンホソガ】

(1) 越冬は被害落葉の中で行われるので、前年秋期に多発した園地では、羽化前（りんごの芽出前）までに園地内の清掃に努める。

(2) 第1世代による実害は少ないので、薬剤による防除は一般に不要である。